

What with...and what with...  
構文考察 — what の役割は何か

小 川 明

0. この論文では次のような what with 構文について扱う。

- (1) a. What with teaching, and what with writing, my time is wholly taken up.
- b. What with his studies, and what with his sports, the school-boy has no time left for idle thoughts.
- c. What with his illness, what with the badness of the times, he is in a very bad way.
- d. What with drink and (what with) fright he did not know much about the facts.
- e. What with all the diseases and the endless isolating pain, what with the uncertainties and the poverty—they were forced to feel strongly.
- f. What with the wind and what with the rain, our wall was spoiled.
- g. And she had never been happy, what with being so clumsy and so poor.

ここで論じたい点は、なぜこの構文で what が使用されているか、言い方を代えれば what の役割は何かという問題である。この構文については、

Curme(1931: 165), 細江(1979: 237-9), Kruisinga(1932: 182), Poutsma(1929: 586-7), Quirk et al.(1985: 1106)などが断片的であるが、言及している。生成文法の枠組みのなかで、まとまってこの構文を扱っているのがGen'ey(1994)である。しかしその関心はここで取り扱いたいと思っていることとは違う所にある。次の(2a)のwhat with...の部分の構造が(2b)であると仮定すると、

- (2) a. What with having to push a cart of flowers through the lobby tomorrow morning and all, he'll have to wake up at 6 a.m. to get there in time.
- b. [<sub>CP</sub> What [<sub>C'</sub> [<sub>C</sub> with] [<sub>IP</sub> PRO [<sub>I'</sub> [<sub>I</sub> have<sub>i</sub>-ing] [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> to push a cart of flowers through the lobby tomorrow morning and all ]]]]]

PROは前置詞withに統率されてしまうことになり、「PROは統率されない」という生成文法の定理に抵触する。この定理に矛盾しない説明方法を探るという形で議論が進行する。この問題は、生成文法の枠組みのなかでは大きな問題になるが、ここでの関心はそこから外れた所にある。

1. この構文の特徴をまず述べる。前置詞はwith が現在普通であるが、過去の英語ではそれ以外の between, by, for, ofも用いられた。OED(s.v. What)は ‘...in the earliest periods chiefly *for*, later usually, now almost always, *with*...’と述べている。

- (3) a. Altogether, what between March winds, April showers, and the entire absence of May flowers, spring is not a success in cities.
- b. When I had gone but a very few yards, what between the pressure of the air and the awful sense of the consequences that a slip would entail, I found it necessary to drop on to my hands and knees and crawl.

- c. What by threats, what by entreaties, he finally accomplished his purpose.
- d. What by policy, and what by force, the English made themselves masters of all India.
- e. What by diminution of trade, what by the immense weight of taxes, some were actually ruined.
- f. What for poisons, conspirations, and assassinations..., there was no going there by day.
- g. What of the scratching and hair-pulling I received, I was glad to retreat.
- h. Some of these, what of the wear and tear of freshets and of being stranded long summers on sand-bars, were seasoned and dry and without branches.

このように過去の英語においてより普遍的に用いられていて、現在の英語では、過去の遺物として、辛うじて what with の形で残っているという印象を持つ。これは何か英語が持つ共通の変化の流れを反映しているのではないだろうか。

もともとは what with...and what with... と what with は二度繰返されたが、現在は what with...and... の形で使われることが多い。

前置詞のあとには (1) が示すように、名詞句か Ving 形が生じる。Gen'ey (1994) によれば Ving 形には二種類ある。動名詞と絶対構文の場合である。意味的な基準により (4a) は動名詞であり、(4b) は絶対構文であるという。これについては、本稿の主題と直接関係ないので、詳述はしない。

- (4) a. "Drink this," said the nurse, "It'll make you sleep. That's it, take it all down like a good boy. Just relax, you had a big day, what with dying and being reborn and all."
- b. Life in the Mesozoic, 240 million to 65 million years ago, was no picnic, however, what with meteorites slamming

into your backyard every few million years.

whatは任意であることが多い。whatを削除しても文は成り立つことが多い。「英語語法大事典(大修館)」(1015-6)は、(5a), (6a)に対してそれぞれ(5b), (6b)が成り立つことに触れている。

- (5) a. What by dimunition of trade, what by the immense weight of taxes, some were actually ruined.
- b. Some were ruined by dimunition.
- (6) a. What by threats, what by entreaties, he finally accomplished his purpose.
- b. He accomplished his purpose by threats and entreaties.

またPoutsma(1929: 586)は whatがないことがあり、特に betweenに関してそれが顕著に見られることを指摘している。

- (7) a. Between the doctor and the housekeeper it may be easily supposed that Dolf had a busy life of it.
- b. I had stinted myself to such an extent, that, between starvation, want of sleep, and over-exertion, I was worn to a shadow.

意味的には理由を示す。理由を羅列する場合に使われる。whatが副詞的な働きをして意味的には partly と同じようであると考えられている。たしかに現象的にはそうであるが、なぜそのような働き、意味が出てくるのであろうか。どうして疑問詞や関係代名詞として用いられる what がそのような働きや意味をもつのであろうか。その本質的な説明はどこに求めればよいのであろうか。これが本稿で追求してみたい問題である。

さらに what について、OED を調べてみると、この種の用法の説明の隣に、次のような用法があることが述べられている。

- (8) a. Most of the Kings ships which, what great, what little, were about forty.
- b. Seven Children at the least (what Male what Female)

were brought forth.

c. The very perfect bryghtnes, What of the tower, and of the cleare sunne.

d. They rode so long what night and day.

what によって二つ以上の要素が結合される。その形は what X and what Y と what が繰返される場合と、what X and Y と最初にのみ what が現われる場合がある。その意味は some...others, both...and, including...and, as well...as, partly...partly である。what が二度生じ、二番目の what が任意であること、羅列するのに使われることなど、この用法はここで扱っているものと親近性がある。この二つの用法は、全く関係がないのだろうか。この構文についても、なぜ疑問詞や関係代名詞に用いられる what が、このような用法を持つのか、what with...構文と同じ疑問が生じる。

2. 本稿の疑問を解決するための手がかりとして、まず what の他の用法を調べてみよう。基本的には what は疑問詞と関係代名詞として使われる。この二つの用法に、共通なのは何であろうか。

(9) a. What happened?

b. Show me what you bought.

c. The meeting which was held yesterday was a success.

d. Jack is a fine athlete; what is more important, he is a good musician.

e. He felt (what was rare with him) a nausea and distaste of life.

疑問詞の場合 (9a) は、言語表現の外の世界の、なにか不特定な事物を指している。そしてそれがなんであるか聞いている。それでは what が関係代名詞として用いられる場合 (9b) は、どうであろうか。関係代名詞の which は、(9c) が示すように、言語表現の内部にある要素（下線で示してある）を指す。同様に挿入節の what (9d-e) は、明らかに下線部を指している。

しかし (9b) の時はどうであろうか。関係代名詞の指すものは、文の中に存在していない。疑問詞と同様、言語表現ではなく外の世界にあるものを指している。整理すると、what の用法である疑問詞と関係代名詞と挿入節の三つの用法に共通なのは、what が言語表現であれ、外の世界であれ、他の事物を指しているということである。つまり代用形として機能しているということである。ここから、ひとつの推理が浮かぶ。この論文で扱っている用法でもやはり what は他のものを指す代用形として機能しているのではないのだろうかということである。

3. この議論に入る前に、これにとってもよく似たことが、ほかの語の用法で起っていることを指摘しておきたい。その語とは、as である。as には、前置詞や副詞などと結合してできる成句的表現が存在する。as against, as between, as for, as of, as to 等である。

- (10) a. The business done this year amounts to 2000 as against 1500 last year.
- b. The balance of power has shifted as between the enemy's capability and the South Vietnamese capability.
- c. As for myself, my adversity was a blessing in disguise.
- d. Coal will be decontrolled as from 31st March.
- e. The population of this city as of July 1st of this year.
- f. They were to go on "combat alert" as of dawn on the 8th.
- g. A monarchy as opposed to parliament.
- h. As to Smith, it is impossible to guess what line he will take.

また古い英語では、as は時や場所を表わす副詞の前に生じることがある。これは (8) の用法に似ていないだろうか。

- (11) a. One Lucio / As then messenger—Measure for Meas.V.i.73-4.
- b. The prince of Spain, which as to-morrow should have gone

into Italy.

c. He could not get John punished as then.

d. Let hym go and marry her, for as here he hath no thyng  
to do.

この種の as はほとんどの場合、任意であることが注目すべき点である。

(as) against, (as) between, (as) concerning, (as) for, (as) from, (as) opposed to, (as) touching などそうである。as for については、日下部 (1959: 2033) が「ときには for だけで as for の意味に用いられることがある」という Poutsma の指摘に触れている。安井 (1960: 240) もまた C. Stoffel が for がそれだけで制限的な意味に用いられることを、ME より現代英語に至るまで例をあげて、証明していることに触れている。as touching についても日下部は、Curme によれば as touching の代わりに touching が使われるという。as to についても、to 単独で「に関して」という意味を持つ。

(12) a. What will he say to it?

b. There's nothing to him.

ただし as of については現代英語では任意ではない。as of は「・・・現在の」という意味であるが、アメリカ英語では、(10f) のように as from の意味で使う例が多い。歴史的に見ると、この of は時を表わしそれだけで独立して用いられた。そして現在特定の表現にのみその名残が残っている。例えば、of an April afternoon, of mornings, of nights, of late, of old 等である。この of はもともとは「from の義で、OE の副詞的属格の代用に使われたものである。しかし今日では from の義はなくなり、用法も或る特別の語句に限るだけで、大部分 on, in が取って代わった。」(小西 1959: 2163)

(11) の時間や場所の副詞の前の as は古い英語において任意である。また新しい時代になるにつれてこの用法の as は as yet を除いて消滅していった。ただ方言によっては I expect him as next week: におけるようにま

だ見られる。今問題にしている what についても古い英語においてより普通であったことに注目すべきである。つまり as も what も同じ消えていく流れに乗っている。(Iwasaki(1988)は John Gower の作品において as が任意であることの例を収集し、韻律と関係するのではないかという指摘をしていることを付け加えておきたい。)

4. それでは、この as の役割は何なのであろうか。OED にはこの成句的表現を扱う項目がある。その部分を抜き出してみる(下線は筆者による)。

(13) VII. Prefixed to prepositions and adverbs.

32. The original sense is perhaps seen in such expressions *as, as regards, as respects, as concerns*, i.e. 'so far as it concerns,' 'in the degree, manner, or case in which it concerns.'

33. With prepositons, as has the general sense of as far as, so far as, and thus restricts or specially defines the reference of the prepositon; e.g. *as agaisnt, as between. As anent, as concerning, as for, as to, as touching* (Fr. *quant à*), have all the sense of 'as it regards, so far as it concerns, with respect or reference to.'

34. With adverbs and advb. phrases.

a. Of time : *as then, as now, as today, as three years ago*, where *as* has a restrictive force. Still common dialectically : but literary English retain only *as yet*....

b. Of place : *as here, as there, as in that place*.

この用法の as を一言で言えば「制限的」ということである。これは下線の部分に述べられている。しかし制限的とはどういうことなのか。私にはなんとなくわかりにくい。安井(1960: 240)もまた「*as against, as between, as for* などが *against, between, for* などと等価であるとすれば、



これらの句における as の機能が、いったい、なんであるか」という疑問を持ち、この種の as の役割について拘泥している。「制限的」ということをもう少し明確にしてみよう。安井は制限用法が、はっきり認められるのは as yet, as to, as of, as from であるとして、制限的意味が明白に現われるのは、限定されたものと比較されるべきものが、言語表現を伴わず含蓄されているときも含め、その前後にある時であると考え。例えば、as yet がそうである。

(14) a. I have not seen him as yet.

b. I have not seen him yet.

as yet が「これからさきのことはいざしらず、今までのところでは」という限定的意味をもっているのに対し、「yet にはこの意味がないとは言えないだろうが、as yet のほうが、顕現性の度合いが大きいことはいなめないだろう。」と述べる。原沢(1979: 126)は between と as between の差について「as~の方が強意的である以外意味の差はないと思われる。」と指摘する。さらに原沢(1979: 421)は、as against 等について「as は他との対照を強調する役目を果たす。」と述べる。またこれとは違った用法であるが、原沢(1979: 504)は「I think が as I think とどう違うかはむずかしい問題だが、私見では as I think の方が意味が重い」と述べている。以上の例をひっくり返して、言えることは、as は強調として用いられているのではないかということである。

このように任意である要素が強調のために使われるという例は他にも存在する。

(15) a. As two is to three, (so) four is to six.

b. If you are ill, (then) you must stay in bed.

ここでは so, then は任意であり、so, then があると強調された言い方になると言われる。例えば研究社新英和大辞典は「as...so...で比較の意味を強調する文語体用法」と述べる。なぜ強調された言い方になるのだろうか。so, then はそれぞれ as 節、if 節の内容をもう一度繰返している。つまり

so=As two is to threeであり then=If you are illである。

次の例でも、

(16) After all, they are for sale, (as) you know.

asはAfter all, they are for saleを指して、繰り返しが行なわれている。二度内容が繰返されるため、その結果として強調がおこなわれることになる。繰り返しのによって強調がなされることは広く見られる現象である。例えば次の例では、同じ語が繰返されることにより強調が行なわれている(下線は筆者による)。

(17) Dear dear Paul, it was so wonderful last night and such absolute pain to leave you. I lay awake fretting for you..  
.. It's agony to go away from you, and so wonderful to think that soon soon we shall be so much more together. Wanting to be with you always, dearest Paul, ever ever ever your loving Dora.—Iris Murdoch, *The Bell*

それ故 (10)-(11)のasについても同じように下線部を指示する代用形である考えてみよう。

(18) a. The business done this year amounts to 2000 as against 1500 last year. (=10a)

b. As for myself, my adversity was a blessing in disguise. (=10c)

c. The population of this city as of July 1st of this year. (=10e)

d. A monarchy as opposed to parliament. (=10g)

(19) a. The prince of Spain, which as to-morrow should have gone into Italy. (=11b)

b. He could not get John punished as then. (=11c)

c. Let hym go and marry her, for as here he hath no thyng to do. (=11d)

繰り返しが行なわれるために、強調が生じ、そこから「その場合に限る」という制限的な意味が出てくるのである。

実は、as が代用形として使われるのは、ごく普通のことである。(20)において、as は明らかに下線部を指示する。

- (20) a. He is a foreigner, as is evident from his accent.  
b. If, as appears to be the case, Soviet leaders assume they can do little to prevent deployment of the missiles, they would not lose much by waiting.  
c. the man as came yesterday. (方言)  
d. I saw that the face and head were wet with water, as were mine.

Ogawa (1994)では (21)の「として」のasもまた代用形で下線部を指しているのだという主張をしている。

- (21) a. I need you as my assistant.  
b. He impressed us as a bright boy.  
c. Adjectives as heads.

asのほとんどの用法において、asが代用形として機能しているのではないかという主張については、小川(1985)などを参照されたい。

5. それでは what はどんな働きをしているのかという本題に戻ることにする。まず確認したいことは、この構文が理由を示すのは、withの意味から生じていることである。what 自体が理由の意味を持っている訳ではない。たとえば、ジーニアス英和辞典では with が「原因・理由」を示すとして、shake with cold, eyes dim with tears, red with anger, tremble with rage の例を載せている。このことから what 自体が理由の意味を持っているのではないことが分かる (その他の前置詞 between, by, for についてもこのことは言えるであろう)。このことは what が任意であり存在しない例もある事実と整合する。(5)-(7)が示すようにたとえ what がなくても

理由を示すことには変わりはないのであるから。ただし with は partly の意味は持っていない。

さて what が副詞の働きをして、partly の意味を持っていると考えられているが、本当にそうなのだろうか。what のほかの用法を考えると、どうしてそんな意味が出てくるのだろうか。あまりにも唐突ではなからうか。本稿ではこの構文においても、既に述べたように、what はやはり他のものを指す代用形として機能しているのだという仮説を立てる。as と異なり、what はもともと二度繰返されることに注目すべきである。このことが partly の意味に寄与しているのだと思われる。現在では what は繰返さないで what...and...でも用いられるが、and によって結び付けられていることによって理由の羅列が示されていると考えられる。

次の文において、what は下線部を指示する代用形であると考えてみよう。

(22) a. What with teaching, and what with writing, my time is  
wholly taken up. (=1a)

b. What with his illness, what with the badness of the times,  
he is in a very bad way. (=1c)

そうすると (22a) は、my time is wholly taken up with teaching + my time is wholly taken up with writing. であり、(22b) は he is in a very bad way with his illness + he is in a very bad way with the badness of the times. ということになり、理由の羅列がなされることになる。what が繰返されていることが重要な鍵であることが分かる。

(8) の例についても同様の説明が可能である。以下の例についても what が下線部を指示すると仮定してみよう。

(23) a. Most of the Kings ships which, what great, what little,  
were about forty. (=8a)

b. The very perfect bryghtness, What of the tower, and of the  
cleare sunne. (=8c)

c. They rode so long what night and day. (=8d)

そうすると、(23a)は the Kings ships great, the Kings ships little、(23b)はthe very bryghtness of the tower + (the very bryghtness) of the cleare sunne、(23c)はthey rode so long night + (they rode so long) day にそれぞれなる。このことから、some...others や both... and...のような意味が出てくるのであると結論を引き出すことができる。

どちらにおいてもwhat 自体が partly や some...others の意味を持っている訳ではないのである。what が二度繰返されるためにそのような意味が生じるのである。ここで提案した解決法では、what が基本的に持つ代用形としての機能と結びつけた説明を与えることができる。

6. 以上本稿では what with...and what with...構文における what の役割は疑問詞、関係代名詞、挿入節の what と同じように代用形として機能しているのだという主張をした。

\* 例文の出典はいちいち断らなかったが、参考文献などから引用させていただいた。

#### 参考文献

- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Boston : Heath.
- Gen'ey, Hideaki. 1994. What with construction. *English linguistics* 11. 55-75.
- 原沢正喜. 1979.『現代英語の用法大成』 東京： 大修館.
- 細江逸記. 1979.『改訂新版 精説英文法汎論』 東京： 篠崎書林.
- Iwasaki, Haruo. 1988. Pleonastic “as” in Gower’s *Confessio Amantis*. 忍足欣四郎その他 (編),『寺澤芳雄教授還暦記念論文集』 176-83. 東京： 研究社.
- 小西友七. 1959.『前置詞 (下). 英文法シリーズ第三集』 2127-2292. 東京： 研究社.

- Kruisinga, E. 1932. *A handbook of present-day English. Part II. English accidence and syntax 2*. Groningen: P. Noordhoff.
- 日下部徳次. 1959.『前置詞 (上). 英文法シリーズ第三集』1997-2123.  
東京: 研究社.
- 小川 明. 1985. Asの機能に関する試論 — Asは万能代用形ではないか (その1). *Litteratura* 6. 1-24.
- . 1987. Asの機能に関する試論 — Asは万能代用形ではないか (その4).『名古屋工業大学学報』38巻. 57-63.
- Ogawa, Akira. 1994. As-phrases as small clauses. Synchronic and diachronic approaches to language: *A festschrift for Toshio Nakao on the occasion of his sixtieth birthday*, ed. by Shuji Chiba et al., 439-57. 東京: リーベル出版.
- Poutsma, Hendrik. 1929. *A grammar of late modern English. Part I*. Groningen: P. Noordhoff.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. Longman: London.
- 安井 稔. 1960.『英語学研究』東京: 研究社.